

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 4月19日現在

| | |
|-----------|---|
| 機関番号： | 11301 |
| 研究種目： | 挑戦的萌芽研究 |
| 研究期間： | 2011～2012 |
| 課題番号： | 23653237 |
| 研究課題名（和文） | ジェネリック・スキル育成を軸とした後期中等教育の質的改善 |
| 研究課題名（英文） | School Improvement of the Upper Secondary Education Based on Generic Skills |
| 研究代表者 | |
| | 柴山 直 (SHIBAYAMA TADASHI) |
| | 東北大学・大学院教育学研究科・教授 |
| | 研究者番号：70240752 |

研究成果の概要（和文）：

今日、世界的に広範な教育改革運動が推進されている。これらの運動で最も重要なポイントは、ジェネリック・スキルと呼ばれる概念に基づくカリキュラム改革である。この研究においては、この概念の背景、またとくに中等教育を中心としてこの概念がいかに関学校教育を変革しているのかを調査することを目的とした。研究の結果、ジェネリック・スキルに基づく教育改革を定着させるためには、教育目標としての資質能力の明確化ときめ細かいアセスメントが重要であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Today there is a wide range of the educational reform movements all over the world. The most crucial point of these movements is the reformation of curriculum, which is based on a concept called 'generic skills'. In this research, we aimed to research the background of this concept and how it changes the schooling, especially the secondary school. We find that we have to clarify competencies as educational goal and develop an educational assessment in order to conduct the educational reform based on the 'generic skills'.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|-------|-----------|---------|-----------|
| 交付決定額 | 2,600,000 | 780,000 | 3,380,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：学校改善、カリキュラム、後期中等教育、ジェネリック・スキル、アセスメント

1. 研究開始当初の背景

今日、世界的に教育改革運動が進められている。そのスローガンは、知識蓄積型教育から知識活用型教育への転換である。それはキー・コンピテンシー、21世紀型スキル、ジェネリック・スキルなど多様な名前を持つが、基本的には知識・スキル・価値観を含み、従来と比較し幅広い教育目標を示している。先の見えない時代・社会にあって、コミュニケーション能力、異質な他者との協働、問題解

決能力などの資質能力の育成は、学校教育改善の嚮導概念であり、政策的にも喫緊の課題となっている。

本研究で取り上げるジェネリック・スキル論は、職業教育を含む中等後教育の学習成果（ラーニング・アウトカム）として登場してきたが、多様な資質能力を育むためには、専門学校や大学だけではなく、後期中等教育からの取り組みが欠かせない。

このため本研究においては、ジェネリック・スキル論の展開を踏まえ、後期中等教育において多様な資質能力を育成するための指標開発を目指した。この指標開発に成功すれば、受験や資格試験に特化した狭い意味での「学力」ではなく、現実世界の中で生きて働く幅広い「学力」を明示することができ、これによって後期中等教育の質的改善の可能性を示唆することができる。

2. 研究の目的

研究の目的は以下の3点である。

(1) ジェネリック・スキルの概念的検討

ジェネリック・スキルに関わる理論（文献・先行研究）や政策とそれらの成立してきた背景を問う。

(2) ジェネリック・スキルに基づく学校改善、カリキュラム改革の先行事例の調査

実際に、ジェネリック・スキル、あるいはそれに類似した概念を用いて学校改善やカリキュラム改革を行っている先行事例の調査を行う。

(3) ジェネリック・スキルを育成するための指標開発

ジェネリック・スキルをさらにブレイクダウンして、学校教育を通して育成すべき具体的な資質能力を提示する。このため、アンケート調査等を通じて、指標開発を試みる。

3. 研究の方法

上述の「研究の目的」に対応して、

(1) 理論研究

ジェネリック・スキルそれ自体の内実を検討し、その成立過程を明らかにする。ジェネリック・スキルの周囲には、それに関わる理論や学説、またそれを促進する社会的政治的背景もある。これらの構造を視野に入れながら、ジェネリック・スキル概念を検討する。

(2) 先行事例の調査研究

ジェネリック・スキル、あるいはそれに近似した資質・能力の育成を目指す学校・機関を調査し、実態調査を行う。可能であれば継続的にデータ収集を行う。

(3) 指標開発

ジェネリック・スキル育成に関わるカリキュラム編成の実態調査、生徒のパネル調査（縦断的追跡調査）を通して、ジェネリック・スキル定着・促進を図る指標開発を行う。

4. 研究成果

(1) ジェネリック・スキル論の源泉

ジェネリック・スキル論には、2つの源

泉が認められる。一つは、新自由主義的政策の中で、産業界からの要請に基づき、大学生あるいは専門学校生の「雇用可能性」を高めるためのツールとして開発・導入されてきた。その一方で、生涯学習論が次第に浸透する中で、学校教育の意味合いが変化し、生涯にわたる学習のための基礎として、ジェネリック・スキル論が注目されてきた。両者は互いに矛盾するものではないが、ベクトルは異なっている。

(2) ジェネリック・スキルの多様な展開

世界各国でジェネリック・スキルに近似した概念が多数見られる。(1)で述べたように、その概念が「雇用可能性」に力点を置く場合、「生涯学習」に力点を置く場合によって、資質能力のリスト、内容は微妙に異なっている。

また資質能力のリストは、学習者の段階（中等教育段階、高等教育段階、生涯学習段階）によって、同じ国においても多様な様相を呈している。

日本においては、「学士力」「就職基礎力」「社会人基礎力」など省庁ごとに異なる名前が与えられている。

以上のように、ジェネリック・スキル論はいわば水平的にも垂直的にも多様な展開をしており、非常に複雑な構造となっている。

(3) ジェネリック・スキル論に基づくカリキュラム改革 ～ 2つの類型

学校改善、カリキュラム改革に取り組む高等学校、大学を調査してきた結果、ジェネリック・スキル論に基づくカリキュラム改革には、2つの傾向がある。

1つはコア・カリキュラム型である。中等「総合的な学習の時間」や「学校設定科目」、大学における「キャリア教育」はこの事例である。この場合、既存の科目との連携が重要である。

もう1つは、全面的導入型である。これは、すべての科目において、既存の知識に加え、ジェネリック・スキルの要素も導入するタイプである。このため、ジェネリック・スキルのリストを作成し、一つひとつの項目をさらに細分化し、内容と程度（5段階）を示した一覧表に基づき、学習者と教員がアセスメントを行う。この場合、組織のリーダーシップが重要であり、教員には研修機会を提供する必要がある。

前者の事例として、H大学を掲げることができる。H大学は創立130年を越える歴史を持つ大学であり、躰（マナー）、心得（スキル）、愛（ホスピタリティ）を身につけ、知性と感性、国際性豊かな人材育成を目標としている。近年、十分な学生を集めることができず、文学系の学科の組織改編を行い、観光ビジネスに関わる学科を

新設した。この学科において、まさにジェネリック・スキルを掲げ、教育活動を行っている。

基本的に1年生から4年生まで、週1コマのゼミにおいて、ジェネリック・スキル育成が行われている。

数人のグループを形成し、ゼミで示された研究課題に取り組むことになる。1事例ではあるが、学習の目標を示された後、地元のホテル・商店などへの取材を行い、魅力的な宿泊プラン（企画書）を作成し、そして最後はプレゼンテーションを行うことにより、1つの学習サイクルを終えることになる。

教員たちは、授業「ジェネリック・スキル」の導入によって、学生たちが確実に変容しているとの「手応え」を得ている。教員ごとに学生への関わりは異なるものの、いずれの教員も「手応え」を感じているのである。しかし、それ以上の分析は行っていない。自覚的な形でのアセスメントは行っていない。

この事例は、学長のトップダウンで「ジェネリック・スキル」教育を行うことになった。教員間で十分な共通理解を得られないまま、ジェネリック・スキル教育が始まり、試行錯誤を繰り返す中で、次第に質も向上し、既存の科目との連携も深められつつある。

後者の事例は、デウスト大学である。デウスト大学は、スペイン北部のバスク地方ビルバオに位置する私立大学である。バスク地方はスペイン内乱の戦場となったこともあり、国際紛争に関する研究が盛んな大学である。Erasmus や Erasmus Mundus などの国境を越えた教育プログラムも積極的に受け入れる等教育の国際化を推進している大学である。質の高い教育を行っているものの、スペイン語以外の国々において、その知名度は必ずしも高くない。

デウスト大学では、ジェネリック・スキルを「ジェネリック・コンピテンス」ないし「コンピテンスに基づいた学習」（以下 CBL）と呼び、2003 年よりカリキュラム改革に取り組んできた。CBL 導入の直接的要因として3つの要因を挙げることができる。産業界からの要請（雇用可能性を高めること）、生涯学習社会における高等教育の役割の再検討、そしてボローニャ・プロセスによる欧州高等教育圏（EHEA）の構想の3つである。こうした背景の中で、デウスト大学では13のコンピテンスを抽出した。①文書によるコミュニケーションとプレゼンテーション・スキル、②オーラル・コミュニケーションとプレゼンテーション・スキル、③コンピュータ・スキル、④情報管理、⑤チーム・ワーク、⑥問題解決能

力、⑦Learning to Learn、⑧交渉スキル（social interaction skills）、⑨協働学習、⑩自尊心、⑪時間管理、⑫倫理的感覚、⑬意志決定、の13項目である。これらのコンピテンスを一旦、①道具的コンピテンス（所与の目的を達成するための手段ないしツール）、②対人コンピテンス（人々が他者と交渉することを可能にするさまざまな能力）、③組織的コンピテンス（組織を理解することに関わり、全体が相互に関連している部分）、の3つに分類した後、その下に35の指標を設定した。35の指標について、それぞれに5つの段階とディスクリプターがつけられている。

この表が、シラバス作成時に参照され、また個々の授業において教員による学生のアセスメントの基準となり、また学生の自己評価（あるいはピア・レビュー）の基準となっている。

実態に関しては十分な情報収集ができていないものの、アセスメント・ツールが開発され、それが有効に活用されることによって、ジェネリック・スキルの育成が試みられている事例である。

(4) ジェネリック・スキル定着のための3つの鍵

ジェネリック・スキル論に基づくカリキュラム改革、学校改善定着するためには、以下の3点が鍵となる。①育成すべき資質能力を明示したカリキュラム編成、②教師教育改革、③形成的アセスメントの導入と習熟、3つである。

従来の学校教育において、いわゆる主要教科の学習は、教科という枠組みの中で行われ、またそれぞれの教科内容は教科書という形で示されている。これは学校教育が知識獲得が中心であり、またその知識が教科という壁によって規定されていることの象徴である。

こうした教科の壁、知識の在り方（生きた文脈から離れた知識中心）を越えるカリキュラムの編成が求められている。このためには、学習終了時に習得しているべき資質能力、コンピテンスから逆算したカリキュラム設計が求められる。

第二の鍵は、教師教育改革である。教育目標として掲げられている抽象的理念を、自らの生きている生活世界の具体的かつ個別的状況的に即して再解釈し、その中心的なメッセージを主体的に受け止め、実践し続ける教師の存在は必要条件である。ここには、教員養成カリキュラムの改革や研修の体系化などでは済まされない問題が潜んでいる。

第三はアセスメントである。知識の定着、習熟に関しては客観テストで測定できるものと通念がある。しかし、ジェネリック・

スキルのカタログに掲げられた資質能力には客観テストに馴染まないものも含まれている。それらの資質能力を評価するためには、アセスメントの導入が喫緊の課題である。日本ではアセスメントへの関心が低く、またその実践も十分に蓄積されていない。アセスメントのツールを用いた多様なアセスメントの実行が求められている。

(5) 残された課題

本研究が始まる直前、2011年3月に東日本大震災が発生した。協力を予定していた学校も被災した。本研究の眼目であるパネル調査は結果的に行うことができなかった。パネル調査等に基づき、ジェネリック・スキル育成のための指標開発は、残された課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- (1) 清水禎文、ジェネリック・スキル論の政策的背景、東北大学大学院教育学研究科研究年報、査読無、第61集第1号、275-287、URL : <http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/handle/10097/55315>

[学会発表] (計2件)

- (1) 清水禎文、ジェネリック・スキル論に基づくカリキュラム改革、東北教育学会、2013年3月10日、仙台白百合女子大学
(2) 清水禎文、ジェネリック・スキル論の政策的背景、東北教育学会、2012年3月10日、仙台白百合女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴山 直 (SHIBAYAMA TADASHI)
東北大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：70240752

(2) 研究分担者

清水 禎文 (SHIMIZU YOSHIFUMI)
東北大学・大学院教育学研究科・助教
研究者番号：20235675

(3) 連携研究者

()

研究者番号：